

# よろこびの泉

わたし(イエス・キリスト)は、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。

新約聖書 ヨハネ11:25-26

## 質問箱

**問** 愛や希望を語ってくれると期待して十字架の立つキリスト教会を訪ねましたが、牧師は僕に向かかって、何度も罪と言う言葉を言われ嫌になりました。思い返せば警察に捕まるほどのことでは無い、誰もがやったような小さい罪はあります。それを指摘されたようで気分を害しました。

**答** キリスト教が世間で不人気なのは、罪と語る言葉を頻繁に言うことにあるようです。新聞やテレビのニュースのほとんどは犯罪に関するもので、現実の社会は罪に満ちています。けれども、牧師はあなたに具体的な罪を指摘したわけではありません。聖書が言う罪は、法律に違反した犯罪行為ではなく、生き方の方向が根本的に外れていることを言っています。神にかたどって作られた最初の人アダムとエヴァは、エデンの園にある善悪を知る知識の木「それをとって食べるその時、あなたは必ず死ぬ。」(創世記3:17)と言われた木の実を取って食べ、「神を信じて生きる道」を捨て、原則的で最も大きな罪を犯したのです。それが聖書が言う罪で、その後の人類全てが陥ってしまった原罪を指しています。結果、神を無視する自己中心の生き方が全人類に及び、死が決定づけられ今日に至っています。

罪があると言われて嫌な気持ちになるのは、隠れている罪が心の表面に現れてくるからではないでしょうか。人間にはそれぞれ人に見えたくないところがあります。悪い事恥ずべき所、それを他人に見られまいと思つて「包み」隠す、その包むと言う言葉が詰まつて罪と云う日本語になったのです。

罪は心の中に隠せば隠すほど苦しいものです。人の心に神の霊が吹き込まれ、神と語り合える関係にあることこそ人のあるべき姿なのに、それを失った人間は、神に対して罪の状態となつていて、本能的に神との断絶を恐れているのです。その断絶の回復のために、罪なき神の御子イエス・キリストが全ての人の罪を身に負い、身代わりの十字架に死んでくださった罪の罰を受けてくださったのです。この救い主イエス・キリストを信じて罪許され、明るく希望の人生に生きてください。

(児玉 博之)

## 親子のしあわせ

396

我が家には三人の子どもがいます。大学三年生の長男と高校二年生の長女、そして中学二年生の次女です。大学生の長男は、私たちの住む佐賀を離れて名古屋で暮らしていて、夏休みと年末年始に一週間ずつくらい帰省するのみで、あとは携帯電話での連絡です。

今年の夏、教会の集まりで静岡の伊豆に行くことになった娘二人に、「行きに名古屋に寄らない? おばさんのお見舞いとお兄ちゃんのお宅訪問ってどう?」と聞くと、二人は、「泊めてくれるかな?」「部屋はきれいな?」「行ってみたい」ということで長男に交渉したところ、「バイトがあるから案内はできないけど、泊まるのはいいよ」と言ってくれ二泊しました。

九十歳で入院中の私の叔母のお見舞いを終え、兄のアパートに着いてすぐに、「お母さん、ちゃんと勉強しているみたいよ。本があるよ。まあまあきれいな」と電話がありました。その後、兄がアルバイトを終えて帰宅し、三人で就寝したようです。



次の日の夕飯は、待ち合わせをして三人で食べました。娘は、「お兄ちゃん優しくなつていたよ。変わった。色々教えてくれたよ」と言いました。佐賀に居たときは、口げんかが多くて困りました。今回のように兄妹だけで外食し、話すなんて、なんだか成長したなあと感じました。二泊した娘たちは、新しい発見も色々して楽しかったようです。

聖書に「友はどんなときにも愛するものだ。兄弟は苦しみを分け合うために生まれる。」(箴言17・17)とあります。親の願いです。苦しいとき辛いとき、本音が言えて助け合う存在にお互いが必要なのは嬉しいと願っています。

こどものとき口げんかが多くて「離れなさい」とよく言っていました。親から離れ、兄妹から離れると、なんだか見方が変わるのかもしれない。これからそれぞれ自分の道を歩む中で、三人そろって食事をする機会はそう多くないと思うと、ちょっと寂しい気がします。「子どもたち三人が、お互いを思いやって生きていくことができましように。」母親の祈りです。

(相原 幸紀美)

\*この「よろこびの泉」は、統一協会、エホバの証人、モルモン教のものではありません。これらの問題でお困りの方は、上記の教会にご連絡ください。

I面写真：高原幸男

●質問箱への投書(100文字以内)よろこびの泉に関するお問い合わせは [Izumi@japanmission.org](mailto:Izumi@japanmission.org) まで



晩秋・奈良公園

## 枯葉

河野 進

天の父さま  
小さい枯葉も  
自然のままに  
使命を果せば  
かくも美しく装わせて  
大地に帰しなさいます  
大地も快く受けて  
憩わせます

河野 進詩集「母よ、幸せにしてあげる」より

発行所 〒630-0266 奈良県生駒市門前町七-四〇 日本ミッション  
電話〇七四三(七三)一七五四 振替口座〇〇九〇(一六六四)三番

発行人 ファアベイ・D  
編集人 日本ミッション編集部

印刷所 〒350-0303 埼玉県比企郡鳩山町熊井一七〇  
電話〇四九(二九六)〇七二七 新生宣教師印刷部

一年分 送料共 九〇〇円  
定価 一部 一八円



# イエスさまにすがって

西宮市 前田 知子

幼い時から落ち着きがなく、「まどぎわのトットちゃん」講談社出版、黒柳徹子さんによる自伝的物語に登場のトットちゃんにあこがれていた私。そんな私が高校時代に三浦綾子さんの本と出会い、キリスト教に対して堅く閉ざっていた心が少しずつ開いて行ったのです。



▲夫、充彦と一緒に

私は一九七一年二月に兵庫県加古川市で生まれました。両親と一歳上の姉と妹の五人家族でした。

洗礼を受けたのは今から二十七年前、一九九〇年十二月二十三日です。私は小学生の頃から落ち着きがなく、また色々と思うようにいかず、苦しい中学、高校時代を過ごしました。それで高校時代からクリスチャン作家・三浦綾子さんの「道ありき」とか「この土の器をも」などの著書を必死になって読んでいました。中学生の頃、母が通っていた教会の教会学校の先生から、三浦綾子さんのエッセイ集をいただき、それがきっかけで前述の本を読むようになったのです。当時、世の中はバブル時代でしたが、私はというと、成績もバツとせず、性格も悪く「良い大学、良い就職、良い結婚」という世間一般の価値観からはとうに落ちこぼれているように思えて将来が不安でした。

## 閉ざっていた心

それでも、当時NHKで放映されていたド

ラマ「大草原の小さな家」を見ては「こんなふうな幸せがあるかも」と、心密かに思ったりもしておりました。

ある日に読んだ三浦さんのエッセイにこんな場面があったのです。うる覚えで正確ではありませんが、三浦綾子さんは外出から帰った時、着ていた服を脱ぎ散らかしたままにしておくとおぼろげがあったようです。それを見てご主人の光世さんは怒ることもせず、綾子さんに「かつちらかしのお綾」というあだ名をつけてたそうなんです。この淡々としたエピソードが、私のキリスト教に対して固く閉ざしていた心を少し開かせたのです。そして将来に対する光が見えたような気がしました。その後、栄養士になる為の専門学校に入学しましたが自信のなさから三日で休学しました。

## ギデオン聖書を

二年後、三浦綾子さんの本と共に少しずつ読んでいた、高校時代、校門の前でいただいたギデオン聖書(学校や病院などに聖書を無料配布する団体ギデオン協会配布の聖書)に書いてある希望を信じて洗礼を受けました。信じるにあたって何度も読み返した聖書の言葉は「艱難は忍耐を生み出し、忍耐は練達を生み出し、練達は希望を生み出すことを知っているからである。そして、希望は失望に終わることはない。」(ローマ5:3-5)という言葉です。受洗後、栄養士の学校へ一度は復学しましたが、一年半後、やはり摂食障害という病気が原因で再び休学しました。でも、今回の試験はイエス様が共にいらっしやることを知っています。それと共に家族や教会の支えなど、

この病気になったことでの大きな恵みがありました。また、不思議に全国の多くの牧師先生や牧師先生の奥様、深い信仰を持った信者さんともお知り合いになり、私の病気に関わって下さり、たくさんの方のこの苦しい中で教えていただきました。

本当に今思えば受洗後、一番苦しい時に涙山の慰めと信仰の成長が与えられていたのです。病気になって教会に行けない日も、私はイエス様から離れようとは一度も思いませんでした。もつと苦しかったクリスチャンになる前の自分を考えると、イエス様にお祈り出来ることの恵め、希望は絶対手放せませんでした。学校は結局退学しましたが、一年半半ばでいたいただいたお料理は今、結婚生活の中で役に立っております。その苦しい時期、父には経済的に母には精神的に、姉と妹からは外の情報を聞かせてもらったり、アイスクリームやケーキなど珍しいお土産を買ってきてもらい心が慰められました。私は受洗してからも長い間、このように神様にお返しすることが出来ず助けていただく一方の日が続きました。

## 見合い、そして結婚へ

そんなふうな家で過ごしておりましたが、お見合いをし、結婚することになりました。相手の方は心優しく賢い人という印象でした。クリスチャンではありませんでしたが、大学時代は賀川豊彦先生(牧師であり社会運動家)が作られた生活協同組合を導入している大学生協でアルバイトをしていて、キリスト教精神にも理解がある人でした。お姑さんは自分の考えを持つ厳しい方だと初めは葛藤を持ち

ましたが、祈りつつ受けるカウンセリングで自分を見直し、教会の先生から、夫婦生活へのカウンセリングを受けていく内、今ではその厳しさが、お姑さん自身の勤勉さ忍耐強さだと気が付き、いろいろな人に対する謙虚な様子に尊敬の念を心から持ち仲良くなってきました。聖書の言葉とイエス様が助けて下さると信頼していく時、現実の中にも大きな変化が起こってくることを知りました。

## 夫の救いのために

私は長い間心の中で本当にイエス様が分かっています。礼拝に出席し聖書を読み、神様の助けを求めてお祈りしていく中で、段々とイエス様が私の身代わりになり死んでくださったこと、何のいさおしもなく罪が赦されていることが信じられるようになりました。

旭川の「三浦綾子記念文学館」に行った折まだご存命だった三浦光世先生(かつちらかしのお綾の名付け親)に「主人の救いを祈っています」と叫ぶようにご相談しました。すると三浦先生は、驚きも慌てもせず落ち着いた様子でハッキリと「お祈りは聞かれますよ」と、確信をもって言ってくださいました。

その後もお祈り続けておりましたら、二〇一四年二月二日、夫もイエス様を信じて洗礼の恵みに与りました。しかもその日は私の

誕生日でした。祈りが聞かれたのだと感謝しました。ハレルヤ。

私はクリスチャンになる前、クリスチャンのことを「聖書に書いてあることを全て行う立派な人達」と思っておりました。それでクリスチャンだった実家の母に対しても、大きな勘違いして文句を言っておりましたが、今は信仰を共にする姉妹として、母娘を超えて時には相談しあったり、祈りあったりしています。私の性格の悪さは中々治りませんが、主イエス様の愛の赦しを信じつつ、カウンセリングと心療内科のお薬を続けながら、教会生活と夫婦二人暮らしの家事にいそしんでおります。(体調が悪い時には休んでいても多いですが、主人は優しく「休んでいいよ。お弁当を買って食べよう」と言ってくれます。)

私の好きな聖書の箇所は「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」(イザヤ43:4)です。本当に私のように心も体も弱い者を祝福し、時には用いて下さる愛なる神さまに心から感謝しています。(西宮中央教会会員)

